

ソフトボールの参加動機に関する研究
～中学生女子ソフトボール部に着目して～

Study on the participant's motivation of softball
～focus on middle school women's softball club～

1K10C156-0 倉本慎太郎
主査 原田宗彦先生 副査 宮内孝知先生

【緒言】

中学校の運動部活動が担う役割に関して、文部科学省(2011)は、計画的な実践を通して、生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てること、と定義している。また、文部科学省(1996)は中学生へ運動部活動の所属動機の調査を行った。そこでは、スポーツを楽しみ、競技レベルをあげたいという動機が強いことが明らかになっている。以上のことから、運動部の意義が、中学生側にも積極的に受け入れられ、中学校の運動部活動が、スポーツ参加に大きく貢献しているとわかる。ケニヨン(1973)は、スポーツ参加を発現させる要因として「個人的属性」「重要な他者」「社会化の状況」と説明した。原田(1991)は、スポーツ参加者は技術と知識を持ち、自ら価値を創造していく主体的な存在であると考え、社会化過程における、個人と社会システムとの相互作用を重視するべきであろうと述べている。女性のスポーツ参加動機に関しては、Gill and Dziewaltowski(1988)によると、男性は、女性よりも競争的な要因が強く、女性は男性よりも社会的な要因が強いという指摘がされている。こうしたスポーツの社会化に関する考え方を基に、女子中学生のソフトボール参加動機を検証していく。

【目的】

本研究の目的は以下の3点である。

- ①ソフトボールの参加にあたり最も強く勧めてくれた「重要な他者」を明らかにすること
- ②ソフトボールの参加における社会化の条件となるスポーツ実施の機会や環境、経験による外発的動機を明らかにすること
- ③個人的属性からソフトボールの参加における内発的動機を明らかにすること

【方法】

先行研究と予備調査を基に質問項目を設定し、40項目からなる質問紙による質問紙調査を実施した。調査対象は、競技を実施している1、2年生を設定し、引退をした3年生は含まないものとした。さいたま市の公立中学校6校を無作為に選び、2013年11月25日から12月1日の期間で、各中学校の校内にて質問紙調査を行った。

分析には、SPSSを用い、項目の影響度を測るために、平均値を求め、人口統計的特性による動機の差異をみるために、兄弟・姉妹の競技歴による群分けと、学年による群分けによる、t検定を行った。さらに、中学生の女子ソフトボール部の参加動機を探るために、探索的因子分析を行った。

【結果】

兄弟・姉妹がベースボール型球技(野球・ソフトボール)を行っていたか否かで2群に分けて行ったt検定では7項目で有意差がみられた。学年による群分けで行ったt検定では、8項目で、有意差がみられた。項目の平均値の結果を目的①の視点からみると、「ソフトボールをしている先輩たちがカッコよかったから」の項目に高い値が、「指導者の人に勧められたから」の項目で低い値がみられた。また、目的②の視点から平均値の順位をみると、「仮入部でソフトボールをやってみて面白かったから」の項目で高い値が、「ソフトボールを球場で観た」「ソフトボールをテレビで観た」という2つの項目では、低い値がみられた。さらに、目的③の視点からみると、「体力がつくから」「運動部に入りたかったから」の項目で、それぞれ高い値がみられた。

【考察】

中学生の女子ソフトボール部参加の動機にとって、指導者よりも、部活動の先輩が「重要な他者」の役割を担っていると考えられる。しかし、「指導者に勧められたから」「友達ができるから」の項目で、2年生の方が、高い値を有意に示していることから、1年間の部活動生活を経て、友達と指導者が重要な他者になってきている可能性は示唆される。また、仮入部という中学校入学後の社会的状況の変化で、影響が強いということは、部活動に取り組むまで、ソフトボールを実施する機会に恵まれていない可能性が高いということも窺える。更に、兄弟・姉妹の競技歴によって、群分けして分析した結果からは、「新しい経験をしたいから」という項目で、兄弟・姉妹がベースボール型球技(野球・ソフトボール)をやっていない群が、高い値を有意に示した。新しいことへ取り組みようとする挑戦意欲を駆り立てることもソフトボールの参加誘発に重要だと考えられる。

